

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	陳白沙「和陶一十二首」に見られる擬古詩性について
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 307 - 317
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051465
Right	
Relation	



陳白沙「和陶一十二首」に見られる擬古詩性について

鈴木敏雄

一 はじめに

明の儒者陳白沙（一四二八—一五〇〇、陳獻章、白沙子）は、五十六歳の年（一四八三）四度目の入京で翰林院檢討を授けられるが、ほどなく故郷広州の白沙村に帰り、その後は再びは都に期待すること無く、玉台寺のある圭峰山（一名玉台山）に棲み、玉台居士と号して、子弟の育成に努める。その「和陶一十二首」は、恐らくはその帰田と前後し、概ね陳白沙五十五歳以降に、ほぼ一時期の連作として作られたものではないかと推測される。¹

その和陶の意図を考える時、陳白沙は心学者であるので、必ずしも陶淵明のような思いを抱いて隱棲を志してはいない。² 陶淵明の思想や処世にそのまま追従したと言うよりも、故郷に帰って田園生活に入るに当たり、その意味づけを行なおうと考え、その際に和陶を思い立った、との仮説がひとまずは立てられるのではないか。

では、如何に自らの帰田を意味づけているのか。本稿では、和詩を擬古詩の一種と見、陶淵明（および蘇東坡）への模倣という観点からその点に触れてみたい。

二 帰田の決意と和陶「歸田園」詩三首

陳白沙の和陶「歸田園」其一是、陶淵明の原唱と同様に格調が高く、「和陶一十二首」の冒頭に置くに相応しい作と言える。それは自らの帰田の決意を詠んでいる。

我始慚名羈

我始めて名の羈せらるるを慚ぢ

長揖歸故山

長く揖して故山に帰る

故山樵采深

故山は樵采すること深く

焉知世上年

焉んぞ世上の年を知らんや

是名鳥搶掄

是れ鳥の搶掄と名づけ

非曰龍潛淵

龍潜の淵と曰ふに非ず

東籬采霜菊

東籬に霜菊を采り

西渚收菰田

西渚は菰田を収む

游目高原外

目を高原の外に遊ばせ

披懷深樹間

懷ひを深樹の間に披く

禽鳥鳴我後

禽鳥は我が後ろに鳴き

鹿豕遊我前

鹿豕は我が前に遊ぶ

冷泠玉臺風

冷々たり玉台の風

漠漠聖池煙

漠々たり聖池の煙

閑持一觴酒

閑なれば一觴の酒を持し

權飲忘華顛

權飲して華顛を忘る

逍遙復逍遙

逍遙復た逍遙

白雲如我閑

白雲我の閑なるがごとし

乘化以歸盡

化に乗じて以て尽くるに帰せん

斯道古來然

斯の道古より來のかた然るならん

この和詩では、陶淵明が原唱に於いて「少くして俗に
適ふの韻無く、性本より丘山を愛す」（少無適俗韻、性本
愛丘山）と詠み始め、「久しく樊籠の裏に在るも、復た自
然に返るを得たり」（久在樊籠裏、復得返自然）と結ぶ、
その論理構成を比較的忠実に承けることにより、「我始め
て名の羈せらるるを慚ぢ、……化に乗じて以て尽くるに
帰せん……」という、陳白沙自らの生涯を決する「斯の
道」に到り着く構図が詠まれる。

陳白沙は、都で知名度の上がったことによる束縛から
逃れ、故郷の山に分け入り、山中の玉台寺を訪れ、また
山頂の白龍池（聖池）を散策し、あるいは我が家の庭で
菊を採り、田では孤を收穫するという日常生活に戻った。
その際、そのような目下眼前に散在する日常を、心学者
としてはそのまま放置せず、帰田した以上は自らの生活
に意味を持たせようとする。そこに陶淵明が想起される。

模倣文学によって先覚の生活をなぞることにより、自ら
の日常生活を新たに書き直し、自らの今後の思想や流儀

を堅固にすることを思つたものと考えられる。

その際、原唱の論理構成をなぞることによる、自身の
在り方の確立は、和詩に備わる擬古詩性によって齎され
ることになる。かつて蘇東坡も「和陶詩」によってそれ
を試み、成果を見ている。逆に、もしも原唱の論理構成
をなぞらなければ、陳白沙の「斯の道」への到達もさほ
ど格調高くは行なわれなかつたのではないか。

なお、この和「歸田園」詩は三首から成る。其二も自
らの生活の意味づけがなされること其一同様であるが、
其三でも、戦国の高士老萊子夫妻が畚を編んで生活し、
人からの制約を受けなかつた事を典故とし、原唱とは些
か趣きを異にしつつも、陳白沙は日常の夫婦そろつての
農作業が必ずしも順調でないことを、原唱同様に詠む。
そしてその論理構成が結句の「我の行ふか違るかを問は
ず」という、楽しければ行い、憂いがあれば去り、いず
れでも好いという認識への到達を導き、自らの帰田生活
に意味を付与するに至っている。原唱の結句の到達した
「但だ願ひをして違ふ無からしむるのみ」（但使願無違）
という認識までをなぞらなければ、陳白沙の到達点も無
く、いわば日常と変哲が無かつたのではないか。

三 弟子への要望と和陶「贈羊長史、寄遼東賀黃 門欽」詩

陳白沙の日常生活には、言うまでもなく友人や弟子と
の詩の贈答も行われている。

この和詩は、これを寄せられている賀欽（字は克恭、一四三七―一五一〇）が師の陳白沙に与えた書翰に「別來十有六載……先生前年十月二日、與欽書并和陶詩」とあるので、この詩がそれであるとすれば、成化十八年（一四八二）秋、陳白沙が最後の都へ立つ直前（成化十九年到着）に作られたものではないかと思われる（ただし内容からは、帰田後の作のようにも見える）。

此心自太古
何必生唐虞
此道苟能明
何必多讀書
寂寂委山澤
于于來京都
斯人各有分
彼此何能踰
杪秋風日清
呼兒理肩輿
聊爲玉臺遊
言笑誰與俱
屈指意中人
一坐一踟躕
歸來看四壁
四壁光如如
聖道日榛塞

此の心は太古よりすれば
何ぞ必ずしも唐虞に生れん
此の道は苟しくも能く明らかなれば
何ぞ必ずしも書を読むこと多からん
寂々として山沢に委ね
于々として京都に來たる
斯の人各おの分有れば
彼れ此れ何ぞ能く踰えんや
杪秋風日清ければ
兒を呼びて肩輿を理ふ
聊か玉台の遊びを爲すに
言笑誰か与俱にせん
意中の人を屈指すれば
一坐一たび踟躕たり
歸り來たりて四壁を看れば
四壁光として如々たり
聖道日に榛の塞げば

誰哉翦其蕪 誰なるかな其の蕪るるを剪る
夫子久不見 夫子久しく見えず
吾生何以娛 吾が生何を以てか娛しまん
常恐歲月晚 常に恐る歲月の晩るるを
況與音問疎 況んや音問と疎きをや
申以伐木章 申ぬるに伐木の章を以てし
一日三卷舒 一日三たび巻舒せり

詩中に「玉台の遊び」とあるので、陳白沙が村の圭峰山玉台寺に遊んだ時の作であろう。「山沢」か「京都」かで煩悶しつつ、夫子の「聖道」をどこにどのよう敷くのか、『詩』小雅「伐木」にあるように同志を招いて議論したい思いを、十五年間会えずにいる遼東の弟子賀欽に訴えている。¹⁰
その際、陶淵明の原唱が、「黃虞」の書を読むこと及び、商山四皓の遺跡を訪れてその思いを新たにした上で道を復活させることこそ必要である、と北朝に使いする羊長史に説く論理構成を用い、和詩に於いては賀欽に対し、「聖道」はすでに明らかなのだから「唐虞」の書を読む必要は無く、荒みつつある夫子の道を「榛の塞ぐ」ことの無いよう田園で取り戻せば好いと説く構図を作っている。¹³商山四皓に思いを馳せるよう促す陶淵明の構図に擬え、陳白沙も夫子の聖道に思いを馳せるよう賀欽に促し得ているのは、やはり陶淵明の原唱あつての成せる技である。古人の書を読み、その事績を知ることの意義を

説いた陶淵明の論理をなぞりつつ、陳白沙は反対模倣し、逆の意味ある認識を得ている。それも和詩の持つ擬古詩性に負っていることを物語っているのではないか。

四 「道」としての「耦耕」と和陶「懷古田舎」

詩

君子固有憂	君子に固より憂ひ有るも
不在賤與貧	賤と貧とに在らず
農事久不歸	農事久しく帰らず
道路竟徒動	道路竟に徒らに勤む
青陽動芳草	青陽は芳草を動かし
白日悲行人	白日は行人を悲しましむ
沮溺去千載	沮溺は去ること千載
相知恒若新	相知るは恒に新しきがごとし
出門轉窮厄	門を出づれば転た窮厄するも
得已聊一欣	己れを得れば聊か一たび欣ばん
甘雨濡夕畛	甘雨は夕畛を濡ほし
繁花羃春津	繁花は春津を羃ふ
獨往亦可樂	独り往くも亦た樂しかるべく
耦耕多近鄰	耦耕は近隣多し
百年鼎鼎流	百年は鼎鼎として流るれば
永從耕桑民	永く桑を耕すの民に従はん

この和詩は、自らに帰田の決意を導くこととなった、長沮桀溺の示す「耦耕」の道を認識し得た欣びを詠む。

陶淵明の原唱（癸卯歲始春、懷古田舎「二首之二」）の取り上げる「君子」すなわち孔子（論語^{〔註〕}）の「道（農耕）を憂へて貧を憂へず」（憂道不憂貧）という在り方に耳を傾けて始めて陳白沙も田舎を顧み、そこに帰って行ける。陳白沙が「道」としての「耦耕」を思うようになり、孔子と沮溺とを橋渡し出来るような認識に至るのも、やはり原唱の論理構成あつての成せる技であろう。

原唱は「道」すなわち「壺漿もて近隣を勞ふ」（壺漿勞近鄰）「聊か隴畝の民と為らん」（聊爲隴畝民）という、もはや「津（世路）を問ふ」者などいない、近隣とともに「農事」に専念する認識を詠んでいる。もしも原唱のそのような論理展開が示されなければ、陳白沙の生活は行人の外出時と変わらぬ「徒らなる」「窮厄する」日常でしかなかったのではないか。そこに原唱の構図が介在することにより、「己れを得」「耦耕は近隣多し」「永く桑を耕すの民に従はん」という意味づけがなされて行く。

五 「隣曲」との樂しみと和陶「移居」詩二首

陳白沙の生まれた地は広州府新会郡都會村（原籍）であるが、少年時に一家を挙げて同郡内の十二里離れた商業の盛んな江門白沙村に移り住んでいる^{〔註〕}。この和詩其一はその時の思いを詠む。ただし言うまでもなく、少年時の作ではない。白沙村に移り住むようになった経緯を後になって意味づけするため、改めて懷古し、陶淵明が火災に遭い引越した際の「移居」詩其一に和している。

萬金論買鄰 萬金は隣を買ふを論じ
千金論買宅 千金は宅を買ふを論ず

豈不念子孫 豈に子孫を念ひて

而以營朝夕 以て朝夕を営まざらんや

長揖都會里 長く揖す都會の里

來趨白沙役 來たりて趨く白沙の役

壤地何必廣 壤地は何ぞ必ずしも広からん

吾其寄一席 吾は其れ一席に寄す

鄰曲彌樂今 隣曲には弥いよ今を樂しむ

園林尚懷昔 園林には尚ほ昔を懷ふ

吾志在擇善 吾が志は善を択ぶに在り

無然復離析 然かく復た離析する無し

陳白沙は、原籍の都會村に別れを告げて白沙村版築の役についた理由を、それは「鄰曲」との楽しい出会いを求めぬに在り、子孫のためであると詠む。その際の「隣曲には弥いよ今を樂しむ」という認識も、やはり原唱の「隣曲時々來たり、言を抗げて昔に在るを談ず。奇文は共に欣賞し、疑義は相与に析く」（鄰曲時時來、抗言談在昔。奇文共欣賞、疑義相與析）から齎されている。新しい隣人と「善を択んで」ここに暮らし、「復たとは離析する無し」の決意を、陳白沙はやはり原唱の論理構成から得ることになる。

なお、この和「移居」詩二首其二も、意味内容は反対

模倣であるが、やはり其一同様、原唱の論理構成を承ける和詩の擬古詩性により、その認識を得ている。

六 夫婦そろつての「耦耕」と和陶「庚戌歲九月
中、於西田穫早稻」詩

遲明向南畝 明くるを遅ちて南畝に向かへば

疎星在簷端 疎星簷端に在り

夫出婦亦隨 夫出づれば婦も亦た隨ひ

無非分所安 分の安んずる所に非ざる無し

道旁往來人 道旁の往來の人

下車時一觀 下車して時に一たび觀る

問津津不知 津を問ふも津は知らず

仰視飛鳥還 飛鳥の還るを仰ぎ視るのみ

邏苗遠時夕 苗を邏れば遠時夕ぐれ

濯足荒溝寒 足を濯へば荒溝寒し

吾惜耦耕好 吾は耦耕の好きを惜しめば

焉知世路難 焉ぞ世路の難きを知らんや

伐鼓收西畝 鼓を伐つて西畝に収むれば

黃雲被江干 黃雲江干を被ふ

聊用代糟糠 聊か用つて糟糠に代へ

作粥歡賓顏 粥を作りて賓の顔を歡ばす

鄰叟攜兒來 隣叟兒を携へて來たり

嬉戲松下關 嬉んで松下の関に戯る

齊聲鼓腹謳 声を齊へ腹を鼓して謳へば
永謝攢眉歎 永く眉を攢むるの歎きを謝らん

白沙村帰田後は、毎年もちろん収穫期が訪れる。この詩はそのような或る「九月中」の農業風景を詠む。稔りの九月は、例によって早稲の刈り入れから始まる。夫婦ともに日常の苦勞が始まるが、それも原唱の「遙々たり沮溺の心、千載も乃ち相関はる」（遙遙沮溺心、千載乃相関）という「躬ら耕すは歎く所に非ず」（躬耕非所歎）の認識を齎す陶淵明の生活に擬えることにより、原唱は必ずしも夫婦での耦耕ではないものの、和詩に於いては、その苦勞多い日常生活も、実は「津を問ふ」必要の無い、「道」のある、「永く肩を擯むるの歎きを謝る」、無理の無い生活があるとの意味合いが付与される。

七 儉約生活と和陶「九日閑居」詩

無錢撫秋菊

錢無きも秋菊を撫づれば

向夕涼風生

夕べに向んとして涼風生ず

誰爲白衣者

誰か白衣の者の

頗識江州名

頗る江州の名を識ると為さんや

映杯碧水淨

杯に映えて碧水淨く

曜日丹葩明

日に曜きて丹葩明るし

天際雁孤去

天際雁孤り去り

草根蟲一聲

草根虫一声あり

荏苒委時節

荏苒として時節に委ね

徘徊閱年齡

徘徊として年齢を閱

興來發長歎

興来たれば長歎を發し

意盡還一傾 意尽くれば還た一たび傾く

儉德苟不慙 儉德苟も慙ぢずんば

厚禄安可榮 厚禄安んぞ榮ゆべけん

白首希高賢 白首にして高賢なるを希ひ

清謠涉遺情 清謠もて渺かに情を遺る

人生亦易足 人生亦た足り易し

何必勤無成 何ぞ必ずしも成る無きに勤めんや

帰田生活の中で迎える重陽の節句を、陳白沙とは言え、通常であれば自分流儀で過ごすであろう所を、この年は意味ある一日を思い、独り菊見酒を酌むに当たり、陶淵明が江州刺史王弘の使い「白衣の者」の、酒を携えての訪問をうけた一日に擬え、「儉徳をば慙ぢず」という認識を得る一日にしている。原唱の「塵爵は疊を虚しくするを恥づ」（塵爵恥虚疊）「棲遲は固より娛しみ多し」（棲遲固多娛）という認識を導く論理構成に擬えることにより、眼前の日常の菊が陶淵明の菊に変わる。

散在する自らの日常を、陶淵明の過ごした「九日」の筋書きを用いて捉え直すことにより、それが意味を帯び、たとい節約に迫られる生活であっても、「閑居し」「厚禄安んぞ榮ゆべけん」と言い得る「高賢」なる自分を自負するまでに至っている。

八 酒に諧う金木犀と和陶「飲酒」詩

九月九日の菊の節句が過ぎた後も、もちろん陳白沙の

日常ふだんの生活は続く。陳白沙の家には菊のほか金(銀)木犀がある。この和詩は、それに意味を付与する。

木犀冷於菊
更後十日開
清風吹芳香
芳香襲人懷
千回嚙入腹
五内無一乖
雖靡鸞鳳吟
亦有鷓鴣棲
昔者東籬飲
百榼醉如泥
那知此日花
復與此酒諧
一曲盡一杯
酩酊花間迷
赤脚步明月
酒盡吾當回

木犀は菊よりも冷かにして
更に後ること十日にして開く
清風芳香を吹けば
芳香は人の懷を襲ふ
千回嚙んで腹に入るれば
五内一つも乖く無し
鸞鳳の吟靡しと雖も
亦た鷓鴣の棲まふ有り
昔者は東籬に飲み
百榼にして酔ふこと泥のごとし
那ぞ知らんや此の日の花の
復た此の酒と諧ふを
一曲一杯を尽くし
酩酊して花間に迷ふ
赤脚步月に歩み
酒盡きて吾れ当に回るべし

原唱(陶淵明「飲酒二十首」其九)では、遠方から「田父・父老」が酒を携えて陶淵明のもとを訪れ、その在り方について語るといふ論理構成になっている所を、和詩では庭の「木犀」の芳香が陳白沙の杯中(懷中)を訪れ、『莊子』逍遙游の「鷓鴣」営巢自足の心を齎すという構

原唱(陶淵明「飲酒二十首」其九)では、遠方から「田父・父老」が酒を携えて陶淵明のもとを訪れ、その在り方について語るといふ論理構成になっている所を、和詩では庭の「木犀」の芳香が陳白沙の杯中(懷中)を訪れ、『莊子』逍遙游の「鷓鴣」営巢自足の心を齎すという構

図に改修されている。が、和詩中の「那ぞ此の日の花の、復た此の酒と諧ふを知らんや」の二句から、和詩では原唱の「壺漿」に諧う「田父・父老」の言葉が「木犀」の芳香に置き換えられていることは分かる。原唱と素材は異なっても、論理構成は同じであると看做せる。

屈原の漁父にも似る「父老」が酒とともに携えてきた言葉、陶淵明がしばし歎び、「吾が駕は回すべからず」と決める原唱の構図を受け、和詩では陳白沙が木犀の「花の香」を酒とともに服用し、自足というものを認識し、「五内一つも乖く無し」という境地に至っている。原唱が至った「己れに違ふは……迷ひなり」(違己……迷)という認識を承ける和詩の擬古詩性が無ければ、例年の木犀の芳香のみが、陳白沙には齎されただけであろう。

九 帰田後の交友と和陶「和郭主簿、寄莊定山」

詩

この和詩も恐らくは帰田後の贈答詩である。陳白沙からこの詩を寄せられた友人莊定山(莊昶、字は孔暘、一四三七―一四九九)に関する記録に「……(成化)十九年癸卯(一四八三)正月、白沙先生(五十六歳)起取入京、過定山、相留越月、送于揚州。及南還、復送至龍江關、故白沙詩曰『……』……」(唐守勳の識す「墓碑銘」とあり、成化十九年(一四八三)に江蘇省金陵龍江関で陳白沙と文を論じたことを詠むこの和詩の九、十句目「憶昔經江東、多士余所飲」以下が引用されているので、こ

の詩は、陳白沙が白沙村に帰田し、弘治八年（一四九五）以降、母没後の心労で体調を崩していた頃までの間に作られたものであろうと推定できる。

青松出喬木

遙望十里陰

少年不結友

歲暮懷同襟

同襟問爲誰

定山攜一琴

悠然一鼓之

不辨古與今

在昔經江東

多士予所欽

論文一觴酒

惟我與子斟

豈意千載下

復此聞韶音

我病不出戶

何時還盍簪

茫茫宇宙內

與子契其深

青松は喬木を出だし

遙かに望めば十里陰る

少年にして友を結はず

歲暮にして同襟を懷ふ

同襟誰とかがすと問へば

定山一琴を携ふ

悠然として一たび之を鼓せば

古と今とを弁せず

昔に在りては江東を經

士多くして予の欽ぶ所なり

文を論ず一觴の酒

惟だ我と子とのみ斟む

豈に意はんや千載の下

復た此に韶音を聞くとは

我は病みて戸を出でず

何れの時にか還た盍簪まらん

茫茫たり宇宙の内

子と契ること其れ深からん

二首」其一）に擬えることにより、自らの友人莊定山との交わりに同様の意味を持たせている。

陳白沙は自らが世との交わりを控えていることを詩中に「少年にして友を結ばず、歲暮にして同襟を懷ふ」と詠む。陶淵明が今思う唯一の人物が、陳白沙にとつては「同襟」すなわち莊定山一人であることになり、原唱に擬えたことによつて、それまでは自覚的ではなかつた『易』豫の「朋盍簪まる」（朋盍簪）という豫びが、帰田後の二人の交遊にはあることが顕在化して来る。

十 師弟の交わりと和陶「和劉柴桑、寄袁道、見懷一峯之意」詩

この詩の制作年代は、他の作よりも些か早いように思われる。詩題にも見られるように、陳白沙の弟子袁道（字は德純、成化八年（一四七二）の進士、？一四八九、一説に一四八七卒）が、陳白沙の友人羅倫（字は彝正、一峰先生と称す、一四三一―一四七八）の死を奠つたことに對して応えたものである。羅倫が亡くなつた成化十四年（一四七八）かその翌年、陳白沙五十一―二歳の時の作ではないか。

當年臺城會

執手多踟躕

四海一爲別

寒暑逝不居

當年台城に會ふも

手を執りて踟躕すること多し

四海一たび別れを為せば

寒暑逝きて居かず

陶淵明が「交はりを息めて閑業に遊ぶ」（息交遊閑業）際にただ一人郭主簿をのみ思つたと詠む原唱（和郭主簿

遠意屬羅浮 意を遠のくるは羅浮に属き

舉頭望匡廬 頭を挙ぐるは匡廬を望む

胡然金牛谷 胡ぞ然く金牛の谷の

奄忽成丘墟 奄忽として丘墟と成る

蛻骨歸復土 蛻骨は帰して土に復り

靈衿存爲奮 靈衿は存して奮と為れり

庶幾百代下 庶幾はくは百代の下

攀駕以忘劬 駕に攀りて以て劬^{つか}れを忘れん

袁侯西江英 袁侯は西江の英なるも

好德眼中無 德を好みて眼中に無し

尺素每欲近 尺素もて毎に近からんと欲し

十年不作疎 十年も疎んずるを作さず

磨劍患不快 劍を磨きて快からざるを患ひ

快則隨所須 快ければ則ち須つ所に随ふ

永願磨此心 永く願ふ此の心を磨き

恢恢快劍如 恢々として劍を快くし如^かかんことを

詩の構成の特徴としては、前半十二句と後半八句の二段から成る。前半は亡きとも羅倫とかつて金陵に在つていずれ広東の羅浮山に遊ぶ約束をしておきながら、それが果たせなかつた空疎を詠む。後半は弟子の、真の御史と讃えられる英傑、江西吉水の水のひと袁道が、その羅倫の死を羅倫隱居地の江西萬安金牛山に弔い、かつ成化五年（一四六九）の南京以来十年の門人として自分に親しんでくれている信頼を詠んで、共に徳を磨こうと願う。

陳白沙はその羅・袁兩人との、それぞれに異なる在り方の間に自らを置き、結果的に後者に帰する過程をこの和詩を用いて詠む。それもまた、陶淵明の原唱あつての成せる技であらう。

陶淵明は当初、隱士劉柴桑（劉遺民）から乱世を避けて慧遠の白蓮社に入るよう招隱されるが、躊躇しているうちに、親しむべき旧知の「弱女」²³のことが気になり始め、結局帰田して、男耕女織の在り方を選ぶに至る。原唱の「和劉柴桑」詩には、その、劉柴桑の期待に応えずに「弱女」との生活を選んだ過程が、やはり前後二段に分けて詠まれている。陳白沙はその論理構成に擬え、自らの生活に於ける兩種の人物との交流を詠む。

原唱が無ければ、羅倫を失つた後の自らの徳の行方は覚束ないが、陶淵明が躊躇の後に「弱女」との耕織を選ぶ構図を示していることにより、陳白沙には、英傑の評判など眼中になく、ひたすら徳を願う袁道流の在り方に行き着くという意味づけがなされている。

十一 結語

蘇東坡は「古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也。

追和古人則始於東坡」（蘇徹「子瞻和陶淵明詩集引」）と
言う。これは「追和詩（和陶詩）」は「擬古詩」とは異なると言っているのではなく、むしろ「擬古詩」性を含むものであることを示唆しているものと解せる。²⁵

以上見てきた所からは、「和陶詩」がその擬古詩の一種

として模倣文学の性質を備えているとの仮説を、例証し得たかに思う。擬古詩は、一般の徒詩とは異なり、模倣する者に古人特有の論理を齎し、そこで始めてその文学が成立するという特性がある。模倣する者が持ち合わせないものを、擬古詩は取り込んでゐる。「和陶詩」も、和韻と併せて、そのような擬古詩性を備えるものと考えられる。

自らの帰田生活を詠む陳白沙の「和陶一十二首」は、陶淵明の原唱の持つ論理構成を和詩に取り込むことにより、そこに表出される「耦耕」等の自身の在り方に確乎たる意味を付与するに至る。「和陶詩」のもつ擬古詩性は、いわば自身の日常の在り方に陶淵明流の意味を付与する筋書きを提供していると言えるのではないか。

注

(1) 陳白沙「庚戌歳九月中……」詩の題を、曹學佺『石倉歷代詩選』や「四部叢刊」が「庚子歳九月中……」に作ることに、阮榕齡の「年譜」は五十三歳の時の作とするが、書翰の「與張廷實主事」には「章（獻章）閑居、和陶淵明古詩十餘篇、一、二篇中頗自以爲近之、欲録去一笑、未能也」とあるので、黄明同『明代心学宗師——陳獻章』（広東人民出版社、二〇〇五年）の言う晩年の作と見ておきたい。

(2) 陳白沙の心学は、左東嶺『王学与中晚明士人心態』（人民文学出版社、二〇〇〇年）には、「它爲明代前期士人的心理疲憊提供了有劲的緩解途徑、它使那些被理學弄僵硬了心靈的

士人尋到了恢復活力的方法、它爲那些在官場被磨平了個性的士人提供了重新伸張自我的空間」と言う。

(3) 章繼光『陳白沙詩学論稿』（岳麓書社、一九九九年）に「評白沙『和陶詩』」があり、陶淵明との関連に触れている。

(4) 原田愛「蘇徹による蘇軾『和陶詩』の繼承」（『日本中國學會報』第六十三集）は「……『和陶詩』は、舊來の『唱和詩』『擬古詩』と異なる性質・形式でありながら、『唱和詩』が齎す文人間の強い連帶感と『擬古詩』の有する時間の超越性を併せ持つ、新たな文学形態であつた。……」とする。

(5) 和詩中に「槍揄」等の老莊思想に基づく表現が見えることについては、劉興邦『白沙心学』（社会科学文献出版社、二〇一二年）が、逍遙游と陳白沙の自由との関連が有ると指摘している。また「槍揄」や「曳尾於塗中」と自然の楽しみとの関連については、張運華『陳獻章學術思想研究』（人民出版社、二〇一〇年）が論じている。

(6) 陳白沙の生活については、黄明同『明代心学宗師——陳獻章』を参照。

(7) 苟小泉『陳白沙哲学研究』（中華書局、二〇〇九年）に、其二冒頭の「高人」の二句は陳白沙が科挙の羈縛と陋弊を認識しつつ我が思想の帰着地点を探求求めていたことを詠んでいる、との指摘が見られる。また、其二に見られる労働と人倫の楽しみとの関連については、張運華『陳獻章學術思想研究』が論じている。

(8) 陶淵明「和劉柴桑」詩に「耕織稱其用、過此奚所須」と見える「耕織」は、「男耕女織」「夫耕婦織」の意であろう。

(9) 賀欽『醫問集』卷五所収の「往年承教於都下、恩惠之厚、沒齒不忘。……」で始まる書簡に見える。

(10) 陳白沙と遼東の賀欽との遣り取りが専ら書信に依っていたことは、劉興邦『白沙心学』が指摘している。

(11) 羊長史が劉裕北伐後の戦後処理の役を荷なって北朝にしている際、陶淵明は乱世を避けた商山四皓の精神が意味を持つことをあらためて羊長史に告げている(李華主編『陶淵明詩文賞析集』(巴蜀書社、一九八八年)陶道恕「贈羊長史」賞析に拠る)。

(12) 陳白沙が「以我觀書」を主張して「以書博我」に反対したことは、張運華『陳獻章學術思想研究』が指摘している。また、「學貴自得」「讀書不爲章句縛」を主張したことは、劉興邦『白沙心学』が指摘している。

(13) 阮榕齡「白沙門人考」に「獻章之學主靜悟、欽之學期反身實踐」とある。

(14) 「論語」を踏まえる陳白沙の「愛道非愛貧」については、劉興邦『白沙心学』が論じている。

(15) 福田殖『陳白沙文集』(明德出版社、一九九一年)、および黄明同『明代心学宗師——陳獻章』に詳しい。

(16) 陳白沙の「里仁爲美」の思想については、劉興邦『白沙心学』が論じている。

(17) 曹學佺『石倉歷代詩選』等は、題を「庚子歲九月中……」に作る。実際の干支であるとすると、陳白沙五十三歳の時(一四八〇年)の作になる。章繼光『陳白沙詩学論稿』の系年はその五十三歳説を採る。原唱のままの「庚戌……」であると

すれば、六十三歳(一四九〇年)の時の作であろう。

(18) 「横眉」は、『廬阜雜記』に「遠法師結白蓮社、以書召陶淵明。……因勉入社、淵明横眉而去」とあるのに拠る。陳白沙も陶淵明と同様、招聘を回避し、廬山(江門圭峰山麓の小廬山)に在ることを望む。

(19) 原唱の「汨其泥」(其の泥を汨せ)は『楚辭』漁父「世人皆濁、何不涴其泥而揚其波」を踏まえる。

(20) 「懷はるるに和す」(和…見懷)形式の詩である。例えば、明の李攀龍に「立春日齋居對雪憶元美」詩があり、それに答えて王世貞に「答于鱗立春日齋居對雪見懷」詩がある。

(21) 羅倫は「狂」と呼ばれ、陳白沙は「静」を主張する。

(22) 李華主編『陶淵明詩文賞析集』を参照。

(23) 「弱女」は、一説に薄酒を意味すると言うが、陳白沙は「甲鄒汝愚謫石城」詩に「弱女孤兒哭作團」と詠み、娘の意と解している。

(24) 陳白沙「祭袁侍御文」に「君出我處」とある。

(25) 注(4)参照。